

令和 3 年 5 月 3 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04933

研究課題名(和文) 発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of educational programs for nurses that enable daily medical care support for children with developmental disabilities

研究代表者

坪見 利香 (TSUBOMI, Rika)

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：40452180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラムの開発である。小児科のみならず日常的な健康問題によって様々な診療科を受診する発達障害児と保護者に対する支援のあり方を明らかにすることである。複数の診療科を担当する看護師を対象とした教育プログラム「基本編」を開発し、実施することにより診療科の特徴を踏まえた事例の提示による支援方法を知りたいというニーズを確認した。これらを基に小児科、耳鼻咽喉科、眼科、外科・整形外科、歯科・口腔外科での診療サポートプログラム「診療科別編」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害児およびその傾向がある子どもの日常的な診療援助を可能にするために、看護師および医療スタッフが具体的にどのような支援をすべきかを明らかにした。看護師が教育プログラムが活用されることで、診療所に勤務する看護師の発達障害児に対する障害特性の理解が深まり、診療場面における発達障害児が感じている苦痛の軽減および合理的配慮が受けられることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop an educational program for nurses that enables daily medical assistance for children with developmental disabilities. It is to clarify the way of support for children with developmental disabilities and their parents who visit various clinical departments not only for pediatrics but also for daily health problems. We confirmed the need to know the support method by presenting cases based on the characteristics of clinical departments by developing and implementing an educational program "Basic" for nurses in charge of multiple clinical departments. Based on these, we have created a clinical support program "Clinical Department Separate Edition" in pediatrics, otolaryngology, ophthalmology, surgery / orthopedics, and dentistry / oral surgery.

研究分野：小児看護学

キーワード：発達障害 子ども 外来診療 外来看護 診療援助 教育学 看護師

1. 研究開始当初の背景

発達障害について関心が高まる一方、社会における生活のしづらさが課題となっている。発達障害児が生活上感じる不自由さは、感覚の特異性(前庭覚・固有受容覚・触覚・聴覚・視覚・味覚・嗅覚)に起因することのみならず、他者との距離感や、パニック、多動・衝動性などの行動面の課題などがある。感覚特異性は、すべてのケースが有しているものではないが、感覚特異性を有している子どもは、そうでない子どもに比べて不安が高い傾向がある。発達障害児(者)は、健常者と比較して内分泌調節、自律神経調節に問題を抱えていることが多く、さらに自閉症児は、脳波異常や、睡眠障害に加え、アレルギー、胃腸障害、頭痛など健康問題のリスクが通常の子どもより高いことは医療者にはあまり知られておらず、受診目的に沿った処置や診療を受ける際の障害特性による苦痛が理解されにくい。

申請者は、これまで発達障害児の日常的な診療援助に関する看護支援について研究を重ねてきた。それによれば、発達障害児とかわかる機会が多いと認識しており、顕微鏡や診療器具を子どもに使用する耳鼻咽喉科や眼科などの看護師は、小児科の看護師より対応に苦慮していることが明らかになった。発達障害の知識は、疾患や診断基準が基盤となっていることに加え、看護師自身の経験から判断していることから、障害児(者)との接触経験がネガティブな場合は、非好意的な態度に結び付く可能性が示された。看護師は、発達障害に関する学習の機会は極めて少なく、業務や家庭に支障のない範囲で具体的かつ系統的な研修を必要としていた。

一方、発達障害児の保護者は、子どもが日常的な診療を受ける際、体調悪化により水分補給が困難な状況であっても、処置への抵抗から点滴治療が難しく、回復に時間を要するなどから、保護者は、健常児と同様の診療を受けるためには、障害特性に応じた配慮を必要としていた。看護師が適切な対応をするためには、障害理解の段階を促進するための障害理解教育が必要である。障害理解を構成する要素には、障害に関する正確な「知識」、それをもとにした適切な「認識」、それらの認識から形成される「態度」、態度の発言としての「行動」の4つがある。障害理解教育は、「実践の態度形成」を目指し、いかに具体的な教材を提供するかが決め手である。つまり、発達障害児の視点(実感)に立って、何をどのように援助してもらうと助かるか、どのような援助が迷惑なのかを明らかにする必要がある。

発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラムを構成する要素には、看護師の生活年齢や、健康問題に重点を置く従来の対象理解から、発達障害による特性の理解に視点を交換すること、待合室から診察・処置などの場面における具体的な対応が含まれることを明らかにした。この構成要素に基づく研修は、実施済みであるが1回の単発型であり、実施直後の質問紙調査での短期的な評価にとどまっている。障害理解の視点による長期的な評価、つまり発達障害児と保護者に対する「態度」がどのように変化したのかまで明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、発達障害児の日常的な診療援助に必要な看護教育プログラムの開発をすることを目的とする。具体的な内容は次の3点である。1)発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「基本編」の実施および評価、2)発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「診療科編」の開発、3)プログラム「基本編」と「診療科編」を統合した教育プログラムの検討。

3. 研究の方法

1)発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「基本編」の実施および評価

静岡県中部および東部地区に所在する診療所(小児科・耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科)に勤務する看護師32名を対象に、1回あたり90分の研修会を開催した。研修会の前後で無記名自記式による質問紙を配布し、プログラムの評価を行った。

2)発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「診療科別編」の開発

1)の結果を受け、診療科別での発達障害児の特性による苦痛と対処について、事例を作成し、具体的な対応について研究者間で検討を行った。作成した診療科は、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、歯科・口腔外科などである。

3)2つのプログラムを統合した教育プログラムの検討

1)および2)の内容に加え、保護者への対応、他の患者への対応、待合室の環境調整などについて内容を検討し、書籍化した。

4. 研究成果

1)発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「基本編」の実施お

よび評価

参加者に、研修会のプログラム内容別に尋ねた結果、子どもの感覚の過敏さ、子どもが落ち着く環境の工夫・パニックを起こした時の対応(24名)、次いで発達障害児が診察を受ける時の不安な気持ち・発達障害児が理解しやすい説明方法・感覚過敏への対処方法(23名)、子どもが拒否した場合の対応・保護者に配慮すること(18名)、発達障害児の行動の特徴(17名)、保護者から子どもの情報を得るポイント(16名)であった。これらの結果は、先行研究(Tsubomi, 2017)と同様の傾向を示していた。

研修会に関する自由意見を求めた結果、「具体的な対応をした結果、どのような改善が認められたのかについてももう少し詳しく話してもらえると共感しやすい」、「発達障害児との会話の仕方、話し方などももう少し詳しく教えてほしい」、など、より診療内容に則した実践的な関わりと子どもの反応を含んだ説明を要望していた。これらの結果から参加者は、発達障害児の特性や、看護師の対応について知識として理解できたが、具体的な行動に至っていないことから子どもがどのような反応を示すのか予測できていないことが考えられた。また、看護師が必要とする具体的な対応には、具体的な言葉がけも含まれることが記述されていたことから、看護師のかかわりをより実践的に学習できる形式の事例検討会の必要性が示された。

また、「発達障害児が思春期の初潮を迎えた時の説明」、「成人期を迎えた発達障害のある人への対応」、「発達遅滞と発達障害の重複している場合子どもの理解力をどうやって把握するのか」など、幼児期以降の発達障害児への対応や、重複障害のある場合の対応などについて記述があった。今回実施した研修プログラムは、幼児期の子どもへの支援を想定していたが、小児科以外の診療科は、幼児から成人まであらゆる対象を援助しており、発達障害のみならず知的障害などの重複障害の対応経験もあることは想像できる。今回の研修会によって、発達障害の特性理解や基本的な対応が理解できたことから、参加者が実際に経験した事例への対応について検討したいという新たな学習ニーズを引き出す機会になったといえる。

2) 発達障害児の日常的な診療援助を可能にする看護師への教育プログラム「診療科別編」の開発

1) の結果を踏まえ、より具体的な対応を示すために診療科別編の教育プログラムの開発を行った。小児科では 口の中を診察する、首周りの診察、胸部及び背部の聴診、感染症の検査キットの採取方法、採尿、血圧測定、注射などの針を刺す行為、X線検査、心電図検査、CT・MRI検査など、耳鼻咽喉科、眼科では、光源を用いることや、器具を用いて診療を行う上での子どもとまどいと対処、その他外科・整形外科、歯科・口腔外科における子どもとまどいと対処について検討した。

3) プログラム「基本編」と「診療科編」を統合した教育プログラムの検討

これらの結果に加え、障害特性が重なっている事例紹介、発達障害児および家族への対応に加え、周囲の患者および医療スタッフとの連携の在り方、子どもの入院に必要な準備、保護者への説明、医療機関との情報共有の在り方などを含めた診療場面ごとの対応や工夫についてまとめた書籍「看護師・医療スタッフのための発達障害傾向のある子どもの診療サポートブック」を出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 TSUBOMI Rika	4. 巻 16
2. 論文標題 Needs of Training Nurses in Charge of Outpatients with Developmental Disorder	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Asian journal of disable sociology	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪見利香	4. 巻 18
2. 論文標題 発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムの開発 短期的効果の検証	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 障害理解研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 徳田 克己監修、坪見利香・水野智美著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 診断と治療社	5. 総ページ数 120
3. 書名 看護師・医療スタッフのための発達障害傾向のある子どもの診療サポートブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大塚 敏子 (OTSUKA Toshiko) (80515768)	椋山女学園大学・看護学部・教授 (33906)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------